

43 師承の国

司馬遼太郎 『この国のかたち』



思想というのは、結晶体のようであらねばならない。あるいは機械のように、ときには有機化合物のように論理が整合されていなければならないのだが、その意味で、日本における最初の「思想」は、九世紀初頭、空海(七七四~八三五)が展開した真言密教といえる。

むろん宗教だから、論理の整合といっても、ツバでくっつけたような部分や、マンダラなど視覚的なものが援用されたりもする。また指で印を結ぶしぐさや、真言をとる声、あるいは心に本尊を観ずるイメージなどといった多様な要素も加わっている。ともかくもすべてが即身成仏というただ一点の目的にむかって集中されているのである。

空海が、右の意味においてあまりにも完璧だったために、後進に独創という謀反気をうしなわせた。

後進たちは、ひたすらに宗祖をお大師さんとして鎖仰(さんぎょう)するしかなかった(もっとも例外としてこの系列から、十二世紀「密厳浄土」(みつごんじょうど)という新体系を興した覚鑿(かくばん)が出たが、このことはここではふれない)。

ひとつこまったことは、空海が生前、生身のまま仏になった(即身成仏した)ことである。弟子たちにとって、空海は先人としての叩き台にならず、これを拝跪(はいぎ)するしかなかった。

空海とその弟子の関係が、多分にその後の日本における子弟関係の規範になってしまったのではないかと思ったりするのである。

なにしろ日本人が天地と人間について理論的に考える思考の歴史は、空海と、かれと同時代の最澄(七六七~八二二)からはじまるのである。ついであるが、双方とも「宗祖仏教の開祖になったが、それ以前の奈良朝の仏教には宗祖というものがいなかった。

ところで、最澄は、空海にくらべ、師としての在り方がちがっている。最澄は、唐から天台宗をもたらしたものの、その膨大な教典や解釈などの資料を整理したり体系化したりするゆとりのないまま死んだ。

かれの天台宗は、密教に対して顕教だったし、かれ自身、きわだって顕教的な性格でもあった。

顕教とは、目や耳でとらえることができる体系をさす。また、密教には、教祖がない。教祖といえば絶対の真理(法身)(ほっしん)がそれで、この点、顕教は歴史的存在である釈迦を教祖とし、諸経典も、読んで意味のとおりというものなのである。密教が、心身ありっただけで感じねばならないのに対し、顕教は読んでわかるものといっている。

自然、最澄は空海とちがい、弟子たちから神秘化されず、されようとも思っていなかった。

かれは、日本史における一大精神文化財ともいべき叡山をひらいた人なのだが、こんにち叡山の最澄の廟に参って現世利益をねがう人はいないのである。このことは、福沢諭吉や大隈重信の墓に詣って大学合格祈願をする者がいないのとかわりがない。

その点、最澄はまことにスマートなもので、生前も死後も、一個の知性として存在し、それ以外の神秘的属性をもたなかった。

最澄の死後、弟子あるいは後世の弟子たちは、いそがしかった。最澄がのこした風呂敷包みをそれぞれが解き、経や論や疎(注解書)をとりだしては自分流に読み、自分の頭で考えた。

そのような、いわば各自勝手な(あるいはおのおのによる暗中模索の)"研究"が三世紀もつづき、ようやく十三世紀の鎌倉時代、叡山を下りた天才たちによって日本独自の仏教が開花するのである。

たとえば、叡山に存在した浄土関係の經典から法然が浄土宗をおこし、親鸞が浄土真宗をおこした。また法華經関係の經典から日蓮が出た。

十三世紀に中国から入った禅でさえ、もとは叡山から出たといえる。のち入宋(にっそう)して臨済宗をおこす栄西や曹洞宗をおこした道元も、叡山で学んだひとびとであった。

このように、叡山における思想上の生産性のゆたかさは、最澄が叡山をドグマの府にせず、同時代のヨーロッパの大学ほどの開放性をのこしたからといえる。

ところが、せっかく日本化された仏教が誕生したのに、禅をのぞき、それぞれの宗祖たちは、最澄をまねずに空海をまねた。このため、思想はふたたび生産力をうしなった。同時代以後のローマ教会の歴史からみれば、日本仏教はその後、ひたすらに澱(よどみ)みつづけた。

その原因のひとつに師承という悪しき伝統がある。

師承とは、鎌倉から江戸期にかけて、ふつうにつかわれていたことばで、"我流"の対語ともいえる。

道元は「正法眼蔵」(しょうぼうげんぞう)の中で師承を肯定して、「師にあらざれば体達すべからず」といっており、筋目の師につかねば身につかないという意味のことを述べた。それはそれでもっともなことなのだが、時を経て、師承の意味は鉛のように重くなった。その体系をたれから承けたか、ということが重要になり、また師の名声によって弟子の生涯の大小がきまったりした。さらにはこの悪習は、師の説くことから一步も離れてはならないという閉鎖性を重くする作用もした。

もっとも親鸞だけは、「弟子一人ももたずさふらふ」(「歎異抄」)とし教団を否定したが、その子孫の蓮如が、十五世紀、遠祖の親鸞をかついで本願寺という一大教団をおこした。

カトリック教会が、世々の時代思想と正面から対決し、血みどろの神学史を織りあげ、これによってつねに人間の世から離れずにいつづけていることに比べると、鎌倉期に出發した日本仏教は、停頓保全をえらび、師承を偏重し、たえず経営安泰主義でやってきた。

私は日蓮宗にくらいから例としてあげないが、明治という文化大革命期でさえ、各宗派は思想的刺激をおぼえなかったようで、ひたすら保全だけにつとめ、寺が食えればいいという姿勢を保ちつづけた。

思想的反応は、わずかに二例だけあった。まず、浄土真宗の西本願寺が明治中期、反省運動をおこしたことである。

当時、横浜や東京で布教をはじめていたキリスト教の神父や牧師たちのまじめさはきわだっていた。本願寺の有志たちはこのことにおどろき、おれたちはどうしてこうもふまじめなんだろうと、小学生のように反省した。

まず、おれたちは酒を飲みすぎる、ひとつ飲まないことからはじめようじゃないか、という合意のもとに「反省会」というものが生まれ、明治二十年、「反省会雑誌」(のち「反省雑誌」に改題)を出した。

「禁酒進徳」をモットーとし、いわばお行儀をよくしましょうという子供っぽい運動だったから、思想的深まりをみせるまでにいたらぬまま終わった。ついでながらこの雑誌は十年余つづき、明治三十二年、「中央公論」という名になり、やがて本願寺と無縁になって、べつな発展をした。

おなじ浄土真宗の東本願寺の場合は、明治という時代を思想的にうけとめた唯一の例をつくった。

教団の金で秀才に学費を出し、とくに清沢満之(まんし)(一八六三~一九〇三)に期待した。清沢は明治十五年に大学予備門に入り、のち西洋哲学を専攻した。とくにヘーゲルを学び、そのとりこになることなく、その方法意識について欠陥を批判したりもした。

その上で、ヘーゲルの弁証法をもって、仏教思想と親鸞思想を基礎づけ、いわば、哲学的に近代化したのである。

清沢の活動がなければ、親鸞は"お他力さん"などとよばれる北陸・東海の篤信者にとりかこまれただけの泥くさい存在におわっていたにちがいない。

この清沢の新解釈がなければ、親鸞の「歎異抄」が、昭和初年以後、知識人にとってつねに新鮮な書として印象づけられることもなかったはずである。くりかえすが、こんにち親鸞といえ、ヘーゲルとならべさせても、印象的に違和感を感じさせないというようにしたのは、清沢の力によるものだった。

武道もまた、思想と同様、論理の整合がなければなりたない。

室町期から興った諸武道は、江戸期に入って諸流派とも師承の芸になった。さらには密教の影響が入って、無用の口伝(くでん)や秘伝を設けて、神秘化された。

剣術の分野で、この伝統をこわし、教授法を合理化して万人が参加できる体技にしたのは、江戸末期の千葉周作(一七九三~一八五五)だった。柔道においてそれをやったのは、明治の嘉納治五郎(一八六〇~一九三八)だったことは、よく知られている。

武道のような体技もふくめて、この師承の国で、師承を基礎にしつつも伝統にあたらしい大展開をみせた明治までの例は、私が理解する範囲で、千葉、清沢、嘉納の三人だけだったように思える。

三人とは、なんとも少なすぎるようである。